

幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発 - 2 -

深澤 清治 松浦 伸和 松尾 砂織 洲濱美由紀
岡 芳香 加藤 秀雄 杉川 千草 朝倉 匡夫
居川あゆ子 桑田 一也

I はじめに

本研究は、幼小中一貫教育力を基盤とした国際交流学習のためのカリキュラム開発をめざす具体的な取り組みとして、教材・単元開発を目的とした研究の第2年次である。

本学園では、2003年に研究開発校指定を受けて、国際コミュニケーション能力を育成するための新領域「国際交流学習」を設置・試行を始めた。その中で、外国についての知識蓄積型の国際理解にとどまらず、教室という生徒にとって最も具体的場面において実際に世界の人々と直接的な交流活動を行いながら、双方向型の多文化理解をめざすこと、またそれを通して自らの文化をよりよく理解し、大切にする意識を育てることをねらって取り組みを続けてきた。

その目的達成のため一昨年4月に幼稚園、小学校、中学校そして大学からプロジェクトメンバーを募り、国際交流学習開発部会プロジェクトを立ち上げ研究を開始した。研究に際してテーマを次のように設定した。

研究テーマ

グローバル社会に生きる日本人としての基礎的な国際的コミュニケーション能力の育成を図る幼小中の発達段階に応じた学習の開発

ここでねらいとするのは、園児・児童・生徒を取り巻く社会のグローバル化が著しいこの21世紀において、世界の中の日本に生まれた私たちが幼小中段階でどのような国際的コミュニケーション能力を身につけるべきかを考えることである。その能力養成のため、幼小中の発達段階に応じた教材・単元開発をより具体的に進めることを2年次の目標とした。

II 第1年次の研究成果と課題

初年度の研究においては、単元開発において最も大切なことはいかに幼小中の発達段階に適合した活動を作り、実施するかということであるという前提に立ち、幼小中の各レベルにおける取り組みを考えた。幼稚園では3歳児については、友達とのコミュニケーション能力を育むことを目標として、世界地図というものとの関わりを通して、日本とは違った国があることをゆるやかに気づかせる活動を展開した。

続いて、小学校、中学校では、広島大学への留学生との交流をベースとした活動が展開された。その中で相手の国や個人への理解から、音楽、運動なども含めたコミュニケーションに対する態度を育て、さらには自分たちの日々の学校生活を相手に対して表現する活動に取り組んだ。

このように理解から表現へ、さらには双方向的な交流活動を通して、自らのコミュニケーションのスタイルや態度を内省し、さらにコミュニケーションに対するより積極的な姿勢・行動を目指す変容が見られた。

続いて、第2年次へ向けて次の2点を課題として指摘した。まず、第1年次は幼稚園、小学校、中学校がそれぞれ国際交流学習のための単元開発、授業実践を行ったため、今年度は校種にまたがるひとつの単元の流れとして連続的、系統的な単元開発を重ねて、新領域「国際交流学習」をより具体的なものに定着させていく必要がある。

第2に、子どもたちの実態を把握し、どのような力がついたか、など変容を確認するためにも、評価方法を開発していくことの必要性が指摘された。第1年次においてすでに一部ではアンケートなどを通じてプロジェクトの評価を行ったが、それぞれの校種段階で計画、実践、点検の評価規準を作成し、評価方法についても検討することが第2年次に取り組まねばならない

課題である。

Ⅲ 第2年次の取り組み

前年度の課題を克服し、研究テーマに掲げた目標を実現するために、幼小中大の連携を通して行った実践事例を、学習内容、単元から成果と課題を柱に次のようにまとめた。

Ⅲ-①中学校の実践事例の概要

中学校では、生徒が幼小より培った多文化理解をさらに深め、姉妹校を含む様々な海外の交流相手校との交流学习を前提とした国際交流学习として、全学年に Global citizenship の時間を取り入れている。ここではインターネット上に紙芝居サイトを立ち上げるに至った中学校1年生の実践概要を以下にまとめる。

【学習内容】

学 年：広島大学附属三原中学校1年生 83名
単 元 名：「民話を紙芝居にして交換しよう」
単元の目標：

- ①他国の民話を英語で読み、その内容を理解することができるようにする。(多文化理解)
- ②紙芝居、絵本、民話の表現構造や4コマを基本とした構図を理解させる。(多文化理解)
- ③グループで紙芝居を作り、自国の言葉で表現させる。(自国の言葉での自己表現力)
- ④交流相手校と TV 会議システムやインターネットを使って紙芝居を交換し、コミュニケーションを進んでとろうとする意欲を持たせる。(コミュニケーション能力)

指導計画 (全32時間扱い)

- 第1次 インターネット「デジタル絵本サイト」で世界の民話を読もう (6時間)
- 第2次 紙芝居、絵本、民話の表現構造を学ぼう (4時間)
- 第3次 民話を紙芝居にして、日本の話を伝えよう (12時間)
- 第4次 交流相手から学ぼう (4時間)
- 第5次 交流相手と一緒に民話を鑑賞しよう (6時間)

【単元について】

単元「民話を紙芝居にして交換しよう」の学習を通して生徒に身につけさせたいことは、多文化に関心をもち、積極的にかかわろうとする態度とコミュニケー

ション能力の向上である。21世紀に生きる子どもたちにとっては、言語や文化が異なる国々に住む人々とコミュニケーションをとりながら、お互いの交流を深め、共生しようとする態度が必要となる。日本の民話を紙芝居として扱うことは、生徒にとって身近で、親しみやすい題材である。また、紙芝居を交換した交流学习を通して、コミュニケーション能力は向上するとともに、物語の背景にある言語や文化への関心が深まり、積極的に多文化と関わろうとする態度が育つ題材である。

【生徒の実態とその指導】

前単元で、学校生活に関するアンケート作成と自己紹介文の作成し、複数の交流相手校（アメリカ、オーストラリア、ザンビア、韓国）に作成したアンケートを使った調査を行うなど、様々なことをグループで取り組んできたため、コミュニケーション活動に対して意欲的な実態があった。しかし一方で、思うように英語が理解できず、もどかしく感じている生徒も少なくない。また、物事を考察したり、他者の意見を共有したりする姿勢に乏しく、相手の存在を意識した発表をしようとする意識が高まっていないという課題があった。そこで、指導にあたっては、紙芝居を読んだ交流相手からの感想や意見を活かすことや、分かりやすく相手に伝えるためにはどう修正を加えていくべきかを考えさせる行程で、他者の意見を受け入れ、理解することの大切さを感じさせる授業展開にした。また、学習と向き合えるように毎時間「自己評価カード」で学習の記録をとるように指導した。

【授業の実際】

日本の民話を知らない人たちに分かりやすく伝えるにはどのような表現方法が必要であるか、また、紙芝居の基本的な表現構造を理解するまでに、多くの時間を要したが、紙芝居をデジタル化するためのデッサンや英訳作業も含めて、積極的に取り組んでいた。作成した紙芝居を JEARN（グローバル推進機構）と連携してインターネット上に載せ、読者から感想や意見を求めた。生徒は返ってきた様々な英文の感想を読んだ後、紙芝居の絵や英文に修正を加えて、更新した。

【成果と課題】

資料1より、単元目標である「多文化理解」や「コミュニケーション能力」に関しては生徒の自己評価から、学習への意欲の高さが伺える。今後は、テレビ会議システムを利用した民話鑑賞を交流相手と行うまでを目標としたため、これまで以上にコミュニケーション

ン能力の育成が求められる。そのためには、まず、コミュニケーションを支える自国の言葉での自己表現力を向上させることをねらいとした学習を展開させることが必要である。

資料1 生徒感想文

- ・絵がうまいと褒められたのはうれしかった。英語は難しいけれど、返事が返ってくるのでまたやりたいと思った。
- ・今度は、他の国の物語を知りたいと思う。

Ⅲ-②中学校の実践事例の概要

【学習内容】

学 年：広島大学附属三原中学校2年生 83名

単 元 名：「学校紹介プロジェクト」

単元の目標：

- ① 紹介したい内容を日本語や英語でまとめることができる（自国の言葉での自己表現力）
- ② 間違いをおそれずに、英語で質問や応答ができる（コミュニケーション能力）
- ③ 積極的にコミュニケーションをとろうとしている（コミュニケーション能力）
- ④ 簡単な英文と絵を使って、日本の文化や習慣を紹介できる（積極的な交流・共生を求めていることとする力）

指導計画（全27時間扱い）

- 第1次 パワーポイントを作り、音声・英文を付けて完成する（8時間）
- 第2次 デジカメで写真を貼り付けナレーションを完成させる（4時間）
- 第4次 英文音読練習とVTR撮影（6時間）
- 第6次 留学生を招待して発表会（4時間）
- 第7次 広島大学国際交流室との会議（1時間）

【単元について】

単元「学校紹介プロジェクト」の学習を通して、生徒に身につけさせたいことは、積極的にかかわろうとする態度と英語を使った実践的なコミュニケーション能力の向上である。自分たちの学校を異なる国の人に英語で紹介することによって、自分たちの文化を知り、伝えるとともに、相手の知りたいことを知り、教えようとする本当の意味でのコミュニケーション活動を行うことができる。学校生活を英語で紹介することで異

なる国々から来ている人たちとコミュニケーションを図ることは生徒にとって身近で表現しやすい題材である。またこの題材を通して交流相手からの質問や相手の国の学校生活を教えてもらうことで文化に関心を持ち、理解しようとする態度を育てることができる。

【生徒の実態とその指導】

前単元「放課後何してる？」で学校生活に関するアンケート作成と交流相手からの回答を分析して考察し、学級内で意見交流をして相手の学校生活を知ることから文化を理解することができた。さらに自分たちの学校生活を生の声で伝える活動に対して生徒の意欲が向上してきたと思われる。具体的には英文を書くことが得意な生徒、構成ができる生徒、デジカメなどメディア操作が得意な生徒など、多様な能力を持った生徒の能力が英文を含めたマルチメディア制作という場で発揮された。一方では英文を読む練習を十分とることができず、相手に自分が伝えたいことを正確に伝えることができるだろうかという不安な生徒もいた。わかりやすく、相手に伝えるためにはどうすればよいか考えさせる過程で英文を修正し、正しい発音で相手に伝えようとする意欲が見られた。

【授業の実際】

自分たちの学校について英語でわかりやすく伝えることができるようにさせるために様々なアプローチを加えてきた。具体的にはマイクを使い録音した音声をパワーポイントに貼り付けさせた。また自分たちの発表をビデオ撮影した後、自己評価、相互評価を取り入れ振り返りを行った。マイクを使った録音では何回も繰り返し発音し、自分の声を再生し修正を加える生徒も多くいた。ビデオ撮影では相手に簡単な英文と絵を使って、日本の文化や習慣を紹介しようとする場面が見られた。

【成果と課題】

単元目標である「コミュニケーション能力」「自己表現力」に関しては生徒の感想を分析すると、意欲の向上が見られる。（資料2を参照）人に実際に話して伝える経験が少ない生徒にとって留学生やテレビ会議を想定した授業展開は実践に役立つと思われる。更に今後、テレビ会議を利用して交流相手校や日本の学校について知らない人に伝えるというはっきりした目標を持たせ、意欲をさらに高めていくことができるであろう。このように相手に伝えることができる内容を考えさせ、発表できる多くの場を設定することで実践的なコミュニケーション能力を育成することができるであろう。

資料2 生徒感想文

- ・留学生の人たちの前で紹介しているとうなずいて聞いてくれたので、理解してくれていると思って安心した。分かりやすく話すことが大切だと感じた。
- ・こんな機会はないのでうれしい。今日は外国から見た附属中学校はこんなにすばらしいのだと感じた。
- ・日本人と外国の人では考え方が違い、非常に興味深い意見を聞くことができた。

Ⅲ-③小学校の実践事例の概要

小学校では、多文化理解とコミュニケーションスキルの向上のどちらかにウェイトを置いた学習開発を行っている。1～3年生においては、主に多文化理解を、4～6年生においては、主にコミュニケーションスキルの向上を目指している。しかし、どの単元においても両者は相互に影響し合って学習が成り立っている。ここでは、グアム日本人学校の子どもたちと行った6年生の交流学習について取り上げる。

【単元について】

- 学年：広島大学附属三原小学校 6年生 39名
- 単元名：「附属小から Hafa Adai! (グアム日本人学校の子どもたちと交流しよう)」
- 実施期間：平成16年6月～11月
- 単元について

本単元は、グアム日本人学校の子どもたちとメールなどを交換することを通して、お互いの学校生活や普段の生活の様子を交流し、それぞれの国の文化を大切にしようという気持ちを持たせる学習である。日本人学校の子どもたちとの交流なので、日本語でコミュニケーションをとることが可能である。さらに、公用語の英語を、交流の中で用いることもできる。また、現地にはチャモロ人の文化が残っており、グアムのおかれてきた歴史やミクロネシア本来の文化を学ぶことを通して、世界の国々に目を向けさせることもできる。ここでは、交流という目的意識をもたせた国際交流学習を行うことで、子どもたちに意欲的に学習に取り組みせたいと考える。

○子どもの実態

子どもたちは、5年生から国際交流学習を始めている。ところが、年度当初、子どもたちの国際交流に対する意欲はあまり高いとは言えなかった。5月にイー

ストキャロライナ大学 (ECU) の学生が来校した際、交流をしたいかどうかを子どもたちに尋ねたところ、「交流したい」と答えた子どもは37名中7名で、「交流したくない」と答えた子どもは19名いた。その理由として、「自分たちはまだ英語が自由には話せないから」「言いたいことがお互いにきちんと伝わらないと、相手に失礼だから」といった意見が多くみられた。昨年度5年生の時に、中学校教員との T・T や中学校3年生の生徒が作成した英会話ビデオを用いて、英語学習に取り組んではきたのだが、実際に外国の方との交流の場を設けることができていなかった。そこで、本年度は、学んだことを生かすことのできる場をできるだけ保障するために、まずは、ECU の学生に1日学級に滞在してもらうようにした。すると、初めは尻込みをしていた子どもたちだったが、お迎え会では、片言の英語で自己紹介をしたり、一緒にゲームをしたりして、交流を楽しむことができた。また、授業内容を身振り手振りも取り入れながら一生懸命通訳したり、何とかコミュニケーションをとろうとしたりする姿が見られた。交流後の子どもたちの反応は、「楽しかった」「相手の言うことが分かった」「これまで学んだことが生かされた」など、肯定的なものがほとんどだった。

○学習にあたって

指導にあたっては、グアム日本人学校の教員からのメールをきっかけに、まずはメール交換を始める。その後、子どもたちとともに交流の計画を立て、グアムの地理や歴史、名物などについての調べ学習を行ったり、マルチメディアの時間に学習したことを生かして、学校生活の様子をプレゼンテーションで表現したりするようにする。その際、中学校の英語教員に英会話やライティングの指導をってもらうことで、子どもたちが安心して英語を使うことのできる環境を整える。また、教室にグアムについての資料やこれまでの学習の足跡を掲示することによって、普段の生活の中でも交流学習に親しませたい。

○単元の目標

- ・ グアムの文化について調べることを通して、それぞれの文化を大切にしようとする気持ちを持つことができるようにする。(多文化理解、交流・共生)
- ・ 自分の思いを相手にしっかりと伝え、交流を積極的に進めることができるようにする。(自国の言葉での自己表現力)
- ・ 自分の気持ちや考えを英語で伝えたいという思いや、そのために英語を学ぼうとする意欲を持つことができるようにする。(コミュニケーション能力)

○学習計画 (全13時間扱い)

- 第1次 グアム日本人学校と交流しよう (2時間)
- 第2次 グアムについて調べよう (4時間)
- 第3次 プレゼンテーションをつくらう (6時間)
 - ・ 計画を立てよう
 - ・ 写真を選んで、日本語で説明を付けよう
 - ・ 英語で表現しよう
 - ・ プレゼンテーションを仕上げよう
- 第4次 ふり返りをしよう (1時間)

【授業の実際】

〈第1次〉

昨年度まで本校にいた教官がグアム日本人学校に赴任したのをきっかけに、その教官から6年生あてにメールを送ってもらい、近況報告などのやりとりをすることから交流を始めた。

〈第2次〉

その後、グアムの自然や観光、チャモロ文化についてなど、グループごとに調べ学習を行う中で、日本人学校の児童に現地レポーターになってもらい、グアムの情報を教えてもらうようにした。

資料3 グアム日本人学校の子どもからのメール

広島大学附属三原小学校6年生の皆さんへ

こちらは、グアム日本人学校の6年生のHです。これからグアムと三原附属の皆さんとの間をつなぐグアム日本人学校のリポーターとして活躍します。さて、この前のメールの皆さんの質問の答えを考えてみましたので、きょうはその答えを送ります。

- ①こちらの遠足は、ラムラム山に縦割り班で登る予定でしたが、雨で中止になりました。そこで、ブレイルームでゲーム大会をしました。
 - ②全校の人数が少ないので、小1～中2まで「わくわく班」という班を作って活動しています。
 - ③マカデミアナッツが有名です。(中略)
 - ⑩夏休み、冬休み、春休み。季節はいつも夏なので、ちょっと変ですね。
- では、またメールやビデオで交流しましょう。

〈第3次〉

グアム日本人学校の子どもたちにこちらの学校生活の様子を教えてあげようということで、10月下旬に行った修学旅行の様子を紹介するプレゼンテーションづくりに取り組んだ。

その際、中学校の英語教員とのT・Tによる英語



学習に取り組み、修学旅行のプレゼンテーションを英語で表現するために必要ないくつかの基本的な構文を学習した。

We went to ～. (私達は～に行きました。)

It was ～. (それは～でした。)

We ～. (私達は～をしました。)

We had a good time. (感想)

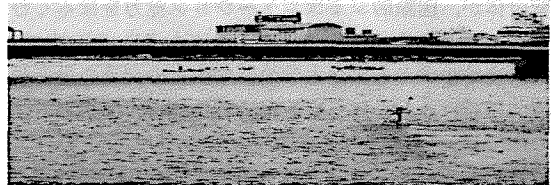
など

また、マルチメディアの時間に学習したコンピュータを活用する力を生かすようにした。

資料4 松江自由散策のプレゼン

Our Memories of Walking in Matsue

僕達の思い出 松江 自由散策



僕達は松江に自由散策に行きました。

We went to Matsue to walk around
それはきれいかったです。

It was beautiful.

僕達は観光をしました。

We went sightseeing.
いろんなものを食べました。

We ate many foods.

とても楽しかったです。

It was very pleasant.

〈第4次〉

グアム日本人学校の子どもたちとの交流学习についてのふり返りを行った。

【成果と課題】

学習後のアンケート調査では、「学習に意欲的に取り組むことができた」と答えた子どもが35名中33名いた。その理由として「グアムの人たちとメールで話が

できた」「一度も会ったことがない人と交流できたことがうれしい」などをあげており、お互いがわかり合うことに喜びを感じていることがうかがえる。「自分から進んで英語を使うことができた」という32名の子どもは、「話すだけでなく英語が書けた」「友達と協力してプレゼンを作ることができた」などをあげていたが、2名は「自信がない」「難しい」ということを感じていた。また、「グアムの文化に親しむことができた」と答えた34名の子どもは、「日本とは違う国のことがよくわかった」「チャモロ語がおもしろかった」など、自国とは異なる文化にふれることを楽しむことができたようである。

これまでの実践を通して、多文化理解や英語学習で学んだことを生かす場を保障し、目的をもった英語学習に取り組ませることで、子どもたちの意欲的な活動を引き出すことができたように思う。その一方で、国際交流学習とマルチメディア学習との融合を考えたカリキュラムを今後整えていく必要がある。

Ⅲ-④幼稚園の実践事例の概要

幼稚園では、「絵本・音楽」「日本古来の文化と四季に親しめる行事」「外国の人々とのかかわり」「異年齢の友だち・高齢者とのかかわり」の四つの視点から国際交流学習のカリキュラムの編成を考えている。幼児期には特に身近な人や、文化にふれるという日常の保育全体が、国際的コミュニケーション能力をはぐくむ土台づくりとなっているととらえている。その中で、今年度幼小中とも広島大学の留学生との交流の場を積極的に設けるようにしてきた。具体的な年間指導計画の中では、「外国の人々とのかかわり」の欄を分けて設けている。ここでは、四つの視点のうちの「外国の人々とのかかわり」についての概要を以下にまとめる。

【実施期間】

平成16年5月～平成17年1月（7回）

【ねらいと保育者の援助】

○いろいろな国の人と一緒に遊ぶことを通してふれあいを楽しむ。（コミュニケーション能力・多文化理解）

- ・ いろいろな人と出会う機会・場を無理のない自然なかかわりの中で設定することで、子どもたちが言葉に関係なく安心感をもち人とコミュニケーションを図ろうとする気持ちをもてるようにする。
- ・ 様々な表現を使える場を構成したり、子どもなりの表現をしっかり認めたりする。

- ・ 子どもたちが相手にかかわろうとする姿をよく把握し、子どもの状況に応じて本人や相手の気持ちを代弁するなど子どもたちが安心して楽しめるように個に応じて援助する。

【実践例 3歳児】

5月10日（月）

主題「イーストキャロライナ州立大学（ECU）の学生が幼稚園に来て遊んだよ」

エピソード1

お帰りの時、10～20人の外国の学生さんたちの突然の訪問に驚いて、固まっている子どもたち。保育者と一緒に「こんにちは」と挨拶をする。チューリップの歌を歌ったが、普段より小さい声で歌う。拍手をもらい少し緊張が和らぎ子どもたちの表情に笑顔がみられる。

それから、「握手をしてもらいたい人？」と投げかけるが、誰も興味を示さない。再度「握手をしてもらいたい人？」と投げかけると、A女が手をあげ、「こんにちは」と言って保育者と一緒に緊張しながら挨拶をする。次第に他の子ども「握手したい。」と出てくる。B男は大きな声で自分から「こんにちは」と言って手を差し出す。A女は帰り際「まだ握手したい」と言って握手を求めるなどとても楽しく親しんだ姿である。

また、学生にデジタルカメラを向けられて、緊張して構えていた子どもたちは、撮った画像を見せてもらうと、にこやかな表情を見せた。

しかし、C男とD男は恥ずかしがったり怖がったりして、保育者が促しても握手をしようとしなかった。



考察

始めは緊張している姿だったが、時間とともに、少しずつ慣れ親しんできたようである。握手をしたり笑顔を交わすなど、言葉ではない方法でコミュニケーションを図っているように感じた。

一方でC男やD男のように、握手をしない子どもたちの姿から、3歳の5月という时期的なことと、子どもたちが安心感がもてるように保育者がかかわっていくことの必要性を感じた。

9月16日(木)

主題「先生や友だちや留学生と一緒に遊ぼう」

(運動会ごっこ・おいかけっこなど自然な遊びの中でのかわり)

留学生 4名

ランジャンさん(スリランカ)

セサルさん(メキシコ)

ブレノさん(ブラジル)

ナチョウさん(アルゼンチン)



考察

子どもたちは伝えたいことがある時に、よりいろいろな人にかかわる意欲をもったり喜びを味わったり、相手に自分が受け入れられていると感じることができた時に、自分からかかわることができる考える。

また、保育者自身が留学生と楽しそうに話をしたりふれ合ったりしている姿が子どもたちのモデルとなり、子どもたちは安心感をもって留学生とかかわることができるのではないかと考える。

12月9日(木)

主題「留学生と一緒に楽器遊びをしたり踊りを踊ったりしよう」

留学生 3名

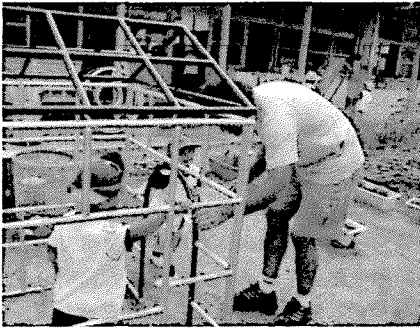
セサルさん(メキシコ)

スマンタさん(バングラディシュ)

ナチョウさん(アルゼンチン)

エピソード2

E男は「一緒にいこう」と留学生さんと自分から手をつないで遊びに行き、ジャングルジムで留学生が頭を打つと「こうやって入るの、小さく小さく」と教えようとしたり「ここ座っていいよ」と言葉は通じないが、E男なりの言葉や動作で思いを伝えようとしながら、自らかかわろうとする姿が見られる。



エピソード3

オオカミさんの追いかけっこが始まる。保育者も一緒に楽しむ。留学生は汗だくになって逃げられる。子どもたちはとても楽しそうな表情をしている。一人の子どもがだっこをしてもらおうと「私もだっこ」と自ら思いを伝えて抱っこしてもらっている。大きな留学生に抱っこされても怖がるのではなく、親しんでいる様子である。

エピソード4

ラテンやアラビアのような曲が流れると、はじめは遠慮気味な子どもたちだが、留学生に「一緒に踊ろう」と声をかけてもらい、A女が「踊りたい」と立つと、次々立って、留学生のマネをしたり曲に合わせて自然に体をゆらしたりしてくる。しかし中にはE女のように「踊らない」という子どももいる。聞いてみると「恥ずかしい」とのこと。「先生と一緒に踊ってみよう」と保育者が声をかけ、一緒に踊ってみると「楽しかった」と喜んでいる。このように、留学生と一緒に踊るのは恥ずかしく距離をとっている姿が見られる。

また、弁当前に音楽をかけると、さっきは恥ずかしいと言っていたE女が、笑顔でコンガ(太鼓)に触れに来る。

お礼に子どもたちが楽器遊びで「ジングルベル」の歌をプレゼントをし、歌ったり掛け声をかけたりしながら楽しそうに楽器を鳴らす。留学生に「上手だった。ありがとう。とっても優しい音だったよ。」

嬉しかったです。」と言ってもらい、子どもたちも「ありがとう、また遊びたい」と言って嬉しそうな様子が見られる。

考察

今までに何回か一緒に遊んでもらって楽しかった、嬉しかったという経験の積み重ねにより、今回の活動では留学生に少しずつ親しみの気持ちが出てくるようになってきている。こういう姿から、年齢に応じた楽器遊びを取り入れることが、しぐさや表情など言葉だけではなく自分なりの表現が出せる場となるのではないかと感じた。

子どもたち一人ひとりの留学生とふれあう姿はちがうが、子どもたちがやってみたいと思える楽しそうな雰囲気をつくるのが大切だと感じた。

【成果と課題】

以上のように、年間を通して留学生との交流を積み重ねてきた結果、次のようなことが考えられる。

いろいろな人と出会う機会・場を設定することで、子どもたちが言葉に関係なく人とコミュニケーションを図ろうとする姿がみられた。幼児期には自分なりの方法でいろいろな人とかわろうとする気持ちが出てくるのが大切であると考えている。そのために、様々な方法で表現できる場を構成し、子どもなりの表現をしっかりと認めたり一緒に喜びを味わったりしていくことが大切だと考える。

伝えたいことがあるとき、子どもたちは、よりいろいろな人にかかわる意欲やかかわりの中で喜びを味わう姿をみせていた。このことから、いろいろな人の思いや気持ちにふれる体験を多く積み重ね、いろいろな人や文化との出会いを大切にしながら、無理なく自然なかかわりの中で外国の人々を身近に感じられる気持ちを育むことが大切ではないかと考えている。また、子どもたち一人ひとりがかわろうとする姿をよく把握し、子どもの状況に応じて本人や相手の気持ちを受けたり子どもたちが安心してかわりを楽しめるように個に応じて援助する。

そして、まず保育者自身が留学生と楽しそうに話をしたり一緒に遊んだりしながら、自然に留学生に親しむ雰囲気や姿勢を大切にしている。そうしたかわりに子どもたちがふれることで、子どもたちは安心感や意欲をもっていろいろな人に親しむことができるようになっていくと考える。

Ⅳ 第2年次（平成16年度）の研究のまとめ

第2年次の中学校、小学校、幼稚園での実践事例の

概要はこれまで述べてきた通りである。以下では、本年度の取り組みを通して得られたこと、および来年度に向けての課題を述べる。

コミュニケーションが成立するためには、一般に、コミュニケーションしようとする相手、内容、意欲、そして意思疎通のための手段があること、の条件が考えられる。このような条件を満たすとともに、国際交流学習を進めるために最も大切なことは、教材・単元開発においていかに幼小中の発達段階に適合した活動を作り、実施するかということであろう。幼小中の各レベルにおいての取り組みをまとめてみる。

まず、中学校においては、「民話を紙芝居にして交換しよう」と題してインターネットサイト上に載せて読者からの意見や感想を求めようとした試みを行った。さらに、もうひとつの試みでは、デジタルカメラやビデオを駆使し、「学校紹介プロジェクト」資料を作成し、留学生を招待して発表会を行った。ことばの形式面の学習が中心になる教科としての英語学習に対して、相手を意識し伝えたい内容を中心にしたプロジェクト学習を通して、コミュニケーションニーズのある実践的能力育成への機会となった。

小学校においては、コミュニケーション手段としての英語に不安があるため、中学校英語教員がその不安を和らげるようなサポートを行い、安心して英語を使うことのできる教室環境を整えた上で、グアム日本小学校の子どもたちとのメール交換を通じた交流活動を取り上げている。その結果、6年生35名中32名が「学習に意欲的に取り組むことができた」と答えている。

幼稚園では、国際コミュニケーションのための土台作りをねらって、普段の活動の中にアメリカからの大学生の訪問学生を受け入れたり、また、留学生と一緒に遊んだりする活動を行った。それを通して、安心感や意欲を持って、ことばや文化を越えた外国の人々とのかわりに親しむことができるようになることをねらった。

こうした第2年次の活動を通して得られたことは、第1に幼小中の各レベルを通じた単元開発ができた点にある。それは平成16年度国際交流学習目標系統図としてまとめられた。たとえばつけたい力のひとつ「多文化にかかわる力」については幼小中を通して次ページのような段階として示された。

このように目標の流れを系統化することにより、幼小中一貫の年間カリキュラムを設定することができた。

第2に、各校種内で学年別に国際交流の時間の評価基準を設定した。その中で多文化理解、自国の言葉での自己表現力、積極的な交流・共生を求めていることと

| 校 種 | 目 標 |
|-----|--|
| 幼稚園 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分と他者の<u>違いやよさに気づく</u> ・いろいろな人や文化と<u>出会うことを楽しむ</u> |
| 小学校 | <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな国の文化に触れることにより、それらの国々に関心をもち親しむことができる。 |
| 中学校 | <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな国の背景にある生活や文化を<u>理解しようと自分から積極的に関わることができる</u> |

する力、コミュニケーション力、という4つの規準別に、あるいはそれらのうち2つをまとめた複合規準なども設定し、今後、より細かな目標準拠・達成型の指導を可能にすることができるであろう。

さらに、評価手法としてアンケートによる数字データによるだけでなく、生徒の意見・感想をまとめた質的データも検討対象としたことで、子どもたちの実態に即した指導を進める上での、大きな示唆を得ること

ができるであろう。

V 今後の課題

第2年次は、前年の取り組みの課題解決から大きく具体的にプロジェクトを進展させることができた。最後に、来年度に向けた課題を検討したい。

第1に、時代の要請としてマルチメディアを利用した教材・単元開発を今後も続けて行くと同時に、逆にそれがなくても自分の体と五感を使って対面的なコミュニケーションを行うことができる力も養成して行かねばならない。コミュニケーション手段としての英語運用力の進展に依存するものではあるが、臨機応変に自信も持って交流する姿を期待する。第2に、交流学习の結果のみを計るだけでなく、それが既存の教科学習にどのように肯定的な影響を及ぼしているのかを検討する必要がある。以上の2点を課題として、本プロジェクトの一応の最終年度としての第3年次の活動に取り組んでいきたい。